慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	書評: 藤田弘夫著 『都市と文明の比較社会学』東京大学出版会、2003年
Sub Title	
Author	中筋, 直哉(Nakasuji, Naoya)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2005
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.10 (2005.) ,p.150- 153
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20050000-0150

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：藤田　弘夫著

『都市と文明の比較社会学』東京大学出版会、2003年

中筋　直哉

本書は、これまでいくつも浩瀚な都市の歴史社会学的研究を世に問われてきた著者の、理論的到達点というべき作品である。「はじめに」でことわられているように、各章ともかなり長大ではあるが、論旨は一貫して明快であり、また諸処にちりばめられた挿話も興味深いので（とくに注が面白い！）、読者は滞りなく読み通すことができる。また、本書の新味は、歴史・比較研究にとどまらず、現代日本の都市社会に関する批判と提言を積極的に行っていることにあり、現実分析に関わる者にも示唆の多い内容といえるだろう。

本書の構成を簡単に紹介しよう。全体では４部９章の構成で、第１部の３つの章が理論的中核を成す。第１章では、都市概念を７つに整理した上で、それらを研究テーマに従って複合的に用いていく基本方針が示される。第２章では、部分社会としての都市と全体社会の関係を３種の形成の論理と３種の解体の論理の拮抗として分析するという、オリジナルな都市の理論が定立される。第３章では、アーバニゼーションの概念が、西欧近代に特化した従来の概念化を超えた、はるかに長期的な過程を意味するものとして再構築される。

残りの６章のうち第４章、第５章、第８章では、より具体的な歴史・比較研究が世界史的規模で行われる。第４章では都市形成の論理のうちの「政治」に、都市解体の論理のうちの「疫病」と「災害」にあたると思われる国家と都市の関係が、第５章では都市形成の論理のうちの「経済」に、都市解体の論理のうちの「飲食」にあたると思われる食糧問題と都市の関係が描き出される。都市形成の論理のうちの「宗教」にあたる章は見あたらないが、それに代わって、第８章では都市および反都市思想の展開が描き出される。

さらに、こうした歴史・比較研究を踏まえて、現代日本の都市社会および都市社会学への批判と提言が行われる。第６章では中央集権の染み通った地方自治の困難が、第７章では都市計画の私的所有権への従属が、第９章では日本の都市社会学のシカゴ学派的偏向が批判される。これは評者の読み込み過ぎかもしれないが、第６章は第４章と、第７章は第５章と、第９章は第８章とそれぞれ対応するものとしても読めるだろう。

以上の作業を通して、著者は読者を現実の日常的都市経験と制度化された都市社会学の言説から解き放ち、逆に読者にそれらへの自由な思考の手がかりを与えてくれるのである。

このような本書から多くを学びつつも、評者は、なお次の３点について著者に再度うかがってみたく思う。

第１点は、本書における歴史の扱い方、歴史観の問題である。この点に考えが及んだのは、

本書を通読して１つの強い印象を持ったからである。それは本書が、いわゆるマルクス主義的な歴史観や歴史理論から慎重に距離を置いているというものである。もちろん、思想の１つや学派の１つとしてのマルクス主義歴史理論に対する言及がないわけではない。しかし、個々の歴史的事実の分析に関してマルクス主義的な解釈が施されることは全くないといってよい。逆にいえば、著者の都市の理論はシカゴ学派都市社会学以上に、マルクス主義歴史理論に対するオルタナティヴとして定立されているように思われるのである。これは非常に強い態度表明である。というのは、歴史研究とくに戦後日本の歴史研究には日本史についても世界史についてもマルクス主義の伝統があって（いわゆる「山川」の高校教科書！）、それに依らないことは非常に困難だからである。評者などはそれにまったく安易に乗り掛かってしまうのだが、著者はオリジナルな都市の理論の定立によって、この伝統を完全に刷新しようとしているように思われる。評者はその静かな決意に感動した。

ただ、その場合にも次の３点については、評者は疑問を持つ。第１に、著者の都市の理論は歴史形成の原動力をどこに求めるのだろうか。第２に、著者の都市の理論に基づくと、アーバニゼーションは反復される景気循環のようなものになってしまい、１回的な事実が積み重なり、過去が未来を拘束すると同時に形成しもするような歴史形成のダイナミズムとしては捉えられなくなるのではないだろうか。第３に、著者の都市の理論は都市を全体社会の１要素として順接的に組み込み過ぎてしまい、都市独自の動きを捉えられないのではないだろうか。逆にいえば、マルクス主義歴史理論は革命のイデオロギーであるのとは別に、これらの点において他の社会理論（たとえばシカゴ学派都市社会学や近代化論）に対して知的に優越していたのではないだろうか。もちろん、これらの点はマルクス主義歴史理論を用いずとも探究可能な課題である。しかし著者の都市の理論は、はたしてそれを可能にするだろうか

ここまで書いて、評者は著者と共通の知的基盤に思い至った。それは本書中にも言及がある、中井信彦『歴史学的方法の基準』（塙書房、1973）である。評者が著者の知遇を得たのはこの本をめぐる会話を通してであったが、この本の第２部「歴史学的方法の基準」がまさに上記３点についての１つの一貫した答えを用意しているように思われるのである。中井は、マルクス主義歴史理論、ウェーバー社会学、柳田民俗学との知的格闘を通して（私見では、その際の武器としてデュルケム社会学が隠し味的に用いられている）独自の歴史理論に到達したが、そこでは歴史形成の原動力は、個人と社会の関係に関する哲学的考察から「人間の欠如性」として導き出されている。また歴史形成のダイナミズムは、その過程自体が研究の第一の目的とされている。さらに都市のような部分的事実独自の動きについては、「形象の自己完結的志向性」というかたちで重視されている。こうした中井の歴史理論と照合しつつ、著者の都市の理論の含意を再度確かめてみたいと考えたのである。

ちなみに、本書に比べてはまことに貧弱だが、評者の場合、歴史形成の原動力は「（人間の）身体の本源的対他相関性」として、部分的事実独自の動きについては、長期の自己組織的な歴史形成とそれに介入する短期の歴史形成との偶然的複合として分析してきた（拙著『群衆

の居場所』新曜社、2005)。

第２の質問点は、著者にとって日本の都市社会、とくに第二次大戦後から現在に至る「戦後日本の都市社会」（そこで展開する都市の思想や都市の科学も含めた）はどのように捉えられるのかということである。もちろん、それは第６章から第９章に述べられていることではある。しかし、著者の立場からは、それはアーバニゼーションの１つの挿話として捉えられるに過ぎず、その問題性の指摘も鋭利ではあるが、外在的なものに留まっているように思われる。もちろんシカゴ学派のように、あるいはシカゴ学派の継承者である日本の都市社会学のように、眼前にある都市社会を絶対視して疑似科学的に分析する過ちからは本書は逃れているが、私たちにとっての生きた拘束／可能性である、歴史としての「戦後日本の都市社会」を理解するには、本書の立場はやや観照的に過ぎるのではないだろうか。他ならぬ私たちの過去であるという認識こそが、この歴史を剥奪されたものではなく獲得されたものとして読み直すこと（拙稿「地域社会学における地方自治体研究の現代的課題」『社会志林』47(３)、2001）を可能にするのではないだろうか。この歴史を、現在を無意識的に抑圧する超自我的な存在ではないものへと解き放つのではないだろうか。

たとえば吉原直樹『時間と空間で読む近代の物語』（有斐閣、2004）や、内田隆三『国土論』（筑摩書房、2002)、小熊英二『〈民主〉と〈愛国〉』（新曜社、2002）といった近年の歴史社会学的研究が、言説の集合と事実の集合の複合態としての「戦後日本」に内在的に迫ろうとしているのとは、本書は対照的である。「都市と文明」という長期持続的視点（ブローデルやマンフォードを継承した）のためにおのずとそうなるのだろうが、そうであれば、こうした「戦後日本の都市社会」研究の限界・問題点を著者がどう捉えておられるのか、うかがってみたく思った。

ちなみに評者は、戦後日本の都市社会学を一般化された理論的言明としてではなく、戦後社会の構造的特質を示準的に表す言説群として評価しており（拙稿「日本の都市社会学」菊池・江上編『21 世紀の都市社会学』学文社、2002)、またそう評価しないと、それを乗り越えて新しい都市の理論、都市社会研究を構築することは難しいと考えている（拙稿「分野別研究動向（都市)」『社会学評論』56(１)、2005)。

第３の質問点は、第１章における７つの都市概念の多元性についてである。その整理の良さ、使い勝手の良さに感心しつつも、しかし、評者はあえて都市の本質的定義の必要性を著者に問うてみたい。７つのうちどれかが最も本質的な都市概念であり、他はそれに従属変数的に関連づけられるのではないだろうか。あるいは７つの概念のさらに深層に、より本質的な都市概念を抽象できるのではないだろうか。この探究は一見純粋な知的遊戯に見えるかもしれないが、評者は、たとえば第２点の問題を考える際にも必要な手続であると考える。この手続き次第では、日本の都市もウェーバーやその理論を深く学んだ著者のように「欠如態」としてではなく、１つの典型として捉えられるはずだからである。

こうした探究の先駆けは鈴木榮太郎『都市社会学原理』（有斐閣、1957）だろう。とすると、

それへの批判として書かれた矢崎武夫『日本都市の発展過程』（弘文堂、1962）との対比も、どちらがよりオリジナルかという問題ではなく、この探究をめぐる理論的応答として読み直せるのではないだろうか。一方、近年こうした探究を続けてきたのは若林幹夫氏だろう。本書と同じ比較社会学の冠を戴いた、彼の『熱い都市　冷たい都市』（弘文堂、1993）や『都市の比較社会学』（岩波書店、2000）で展開される「二次的定住」論について、著者がどう評価・批判されるか、うかがってみたく思った。

ちなみに評者は、この探究に対して、非常に粗雑ではあるが「都市とは集約化された具体的な他者群」であるという本質的定義を与えたことがある（拙稿「都市社会調査法」田中宏編『社会学の視線』八千代出版、1998）。その当否はさておき、この考察の間つねに頭にあったのは、諸経済のなかでの金融経済の独自性だった。金融経済ももちろん１つの経済ではあるが、ケインズの「美人投票」の喩えを挙げるまでもなく、実体経済とは異なる次元に異なる論理で展開することもまた事実である。諸経済と金融経済との関係を諸地域社会と都市の関係に置き換えられないかと、評者は考え、また今でも考えているのである。

その意味で、ウェーバーの都市論として、著者が深く学ばれた、『経済と社会』中のいわゆる『都市の類型学』（創文社、1974）とならんで、初期の小論である『取引所』（未来社、1977）の重要性を指摘しておきたい。

日頃親しくご教示をいただいていること、また好著に出会った興奮から、つい勝手な話ばかりを広げてしまったように思う。著者のご寛恕を乞うとともに、さらなるご教示をお願い申し上げたい。

［本体価格 5250 円］

（なかすじ　なおや　法政大学社会学部）